

師の川口衛とつなぐ橋

構造エンジニア・松尾智恵

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■ 鍛錬

1978年にお母さんの故郷の広島で生まれた松尾智恵さんは、シアトルで6年間と東京で子ども時代を過ごす。現在は、明星大学建築学部建築学科准教授として教鞭に立つ。[建築の場面はもっとも祝祭的な場面に出会える喜びの場である]と言う考えの坂倉建築研究所出身の村上晶子教授と1年半になる。本名は谷岡で、「たにおか設計社」を主宰して実務もこなす。建築技術者の夫との間に二人の子供がいる構造エンジニアだ。多忙だが、充実した日々を送っているのがマスク越しの目からわかる。

何故、構造設計の道に進んだのかと聞く覇志堂に、「答えはシアトルです」と。湾と湖が半分近くを占める美しい地形の街には、必然的に吊り橋も多いし面白い建築も多い。幼い松尾さんは橋に強烈に惹かれ、橋の設計を教えてくれる大学で構造を学ぶと決めた。法政大学に母親が問い合わせると、電話口で「建築学科でも橋の構造は勉強できます」と。そのご返事をしたのがイナコスの橋設計者の川口衛先生だったのではないかと、信じる松尾さん。川口衛先生との師弟の縁は、この時から始まっていたのです。

当然ゼミは川口衛研究室へ。卒業研究のテーマは「並進振子の超高層免震への適応に関する研究」。振子の原理を用いた免震の可能性の実験だが、その研究過程からも問題解決能力の鍛錬ができたという。

大学卒業後は、ドイツのシュトゥットガルト大学院に留学。帰国子女の英語力と川口先生に鍛えられた力で超ハードな授業をこなした。実力は、放課後には授業につ

いて行けないアジア系の同級生に教えるほどだった。留学期間中には、川口衛先生と子息の川口健一先生（東京大学生産技術研究所教授）がドイツを訪れた。一緒に建築を見て回り、沢山話が聞けたのも思い出深い貴重な一コマだ。

■ 構造の原理を学ぶ

帰国して先生と食事したときに、「今、先生の事務所では募集していますか?」と聞くと、その日のうちに事務所面接となって、川口衛構造設計事務所に入所決定。実は結婚や出産のときには辞めなければと覚悟していたが、振り返ると16年間所属した。大学への誘いがあったのは川口先生が在命中で、相談すると「駄目だ!」とはっきり言われた。先生の強い意思が、松尾さんを引き止めていたことがわかります。

覇志堂が「最初は誰が教えてくれたの?」と尋ねると、先輩からは基準書を指さされたのだったと返事。入社3年目の仕事は、川崎市立御幸小学校（2009年/湯澤建築設計研究所）。3、4年は寝食を惜しんでの、鍛錬と呼ぶにふさわしい時間を過ごして構造設計を身につけた。多かったのは学校建築と耐震診断で、代々木競技場第二体育館もある。川口事務所では大きな物件も、経験に関係なく担当者任せ。構造エンジニアとしての判断力が培われるのは当然の結果なのだ。

松尾さんは、仕事と勉強と趣味を兼ねて時に建築見学に出掛けるし、体調管理のためにテニスも楽しむ。キッチンで構造の考えが浮かぶと、それを仕事モードのときに解析する。本質的に合理的な思考回路をもち、それを実践する術を心得ている人のようだ。

川口事務所では、インターンシップに来た学生に構造模型をつくらせるのが定着していた。構造の原理を学び検証するには最適な作業なのだ。今、松尾研究室に川口衛先生が制作指導した薬師寺西塔の十分の一の模型が置いてあり、学生が構造を体感できる。松尾さんの教育の場には、「構造設計とは教わるものではない」という師の言葉が活かされている。

